浜離宮庭園における鴨場についての研究

服 部 勉*
進 士 五 十 八**

A Study of the Ducking Fields in the Former Hama Detached Palace Garden

Tutomu HATTORI
Isoya SHINJI

摘要：本研究では、日本に残る数少ない鴨場である浜離宮庭園の庚申堂鴨場、新銭座鴨場を主たる対象として以下の3点について歴史的に考察を行なったものである。まず鴨場の基本的事項として、①鴨場の構成、東京周辺における分布、起源について確認を行ない、次に②絵図面や江戸期の来訪者が記した記録などから、浜離宮庭園における鴨場の変遷や景観がどのようなものであったかを明らかにし、③浜離宮庭園における鴨場と庭園の意味について考察を行なった。

緒 言

本研究は、浜離宮庭園内の庚申堂鴨場・新銭座鴨場を研究対象とするものの、鴨場の起源など未解明な部分が多いため、鴨場の構成や基本的事項について検討を行った後、本園内の鴨場の役割や性格について考察することとした。

なお、鴨場とは、鴨猟（カモの捕獲）を行う場所であり、現在も実際に鴨猟を行っている鴨場は、宮内庁の新浜鴨場（千葉県市川市）・埼玉鴨場（埼玉県越谷市）の2ヶ所、また鴨場の遺構が残っている所としては、栗林公園内の鴨場（香川県高松市）、天赦園内の鴨場（愛媛県宇和島市）の2ヶ所であり、遺構をあわせても全国にわずか6ヶ所しか残されていない貴重な空間である。

1. 鴨場について

鴨場を考える上では、その構成や鴨猟の方法、立地条件、起源といった基本的事項を知ることが重要であり、以下それぞれについて検討するものである。

(1) 鴨場の構成と鴨猟

現在の鴨場の構成の概略は¹⁾²⁾、「溜り」という池の周囲に、「引堀」という溝が放射状に何ヶ所も伸び、引堀の末端部には「小覗」という引堀の様子を見る小屋が設けられている。また「溜り」には、おとりのアヒルやカモの休憩所として「中島」が設けられている。

おとりのアヒルやカモは音に誘われて「引堀」に入るよう、普段から、餌付を行って飼い慣らされている。この餌付や鴨場内を観察する場所を「大覗」と呼び溜りの周囲に数ヶ所設けられている。

狩猟方法は³⁾、おとりのアヒルやカモを使って引堀に

野生のカモを誘い入れ、人の気配や物音に驚いて引堀から野生のカモが逃げ立つ時に、予め引堀の両側に待機した人が持つ「叉手網」によって捕獲するというものである。

またかつては鷹匠によって訓練された鷹や隼などによって逃げたカモを捕獲する鷹狩も行われていた。

江戸期においては叉手網を使用せずに、鷹狩のみでカモを捕獲することが一般的であり、叉手網を利用ようになったのは幕末から明治期にかけての頃といわれている³⁾。

(2) 鴨場の分布と立地

江戸期、江戸に在勤する大名たちは下屋敷などに鴨場を設置していたことは指摘されているものの⁴⁾、その分布や立地に関する研究は少ない。

鴨場は一般的に池沼と異なり特異な形態をしている。そこで江戸期の地形状況が残されていると考えられる明治初期の測量図⁵⁾と史・資料⁶⁾をもとに東京（江戸御府内周辺）⁷⁾における鴨場の位置を抽出し、分布図を作成し、その立地を見た。（図-1）

図-1に見るように、鴨場と考えられるものは16ヶ所、この中、現存するのはわずかに浜離宮庭園内の鴨場の2ヶ所である。その立地は江戸御府内の境界周辺という郊外に多く分布しており、当時は鴨などの水鳥が飛来・生息する田園地帯や湿地という環境条件であったと考えられる。

しかし、鴨場の多くは大村家の鴨場（現在の新宿歌舞伎町界隈）のように埋立てにより消滅しており、明治以降の急速な都市化と共に姿を消している。

また図-1以外で鴨場が確認できたものとしては、現

*東京農業大学大学院農学研究科博士後期課程 **東京農業大学農学部造園学科

図-1 東京(江戸)における鴨場の分布と立地

在の羽田空港に相当する「黒田家鴨場」、「渡辺家鴨場」、「石関鴨場」、また東京都東村山市の山口貯水池の湖畔の「東京都水道局の鴨場」、茨城県神栖町の「息栖鴨場」、岐阜県大垣市の「戸田家の鴨場」などがあり、鴨の飛来・生息する環境立地条件が整う地域であれば、日本各地に鴨場が存在していたと考えられ、明治期以降に新設されたところも少なくない。

(3) 鴨場の起源

鴨場の起源については従来明らかにされていないが、類似の施設がイギリスやオランダにおいても確認されており、外来文化としての鴨場が、日本において発展したのではないかという見解もある⁹⁾。

しかし、鴨場が鴨を捕獲するための狩猟場所であること、また狩猟方法が江戸期は鷹狩が中心であったということから、江戸期の鷹狩の場所である「鷹場」に鴨場の起源があると考えられる。

江戸期における鷹場と鷹狩は、徳川家康によって制度化され、武芸の鍛錬と同時に、権力の象徴として行われ、江戸を中心に幕府が特定した鷹場においては鷹狩が禁止されるなど、様々な規制が設けられていた。

しかし、徳川綱吉の「生類憐みの令」の公布とともに鷹狩も途絶えていたが、徳川吉宗によって鷹場制度が復活され、その内容もいっそう強化された⁹⁾。

特に吉宗の命名といわれる「綱差」の制度は鴨場の起源を考える上で重要な意味をもっている。

綱差とは鶴や白鳥、鴨などを飼い付ける役人进行意味し、その場所は「飼付場」といわれた¹⁰⁾。

この制度の背景には将軍が狩猟を行う際、獲物が無いと都合が悪い、普段から獲物を飼い馴らし、狩猟の際には何時でも利用できることにすることにある¹¹⁾。

飼付場は、鳥の種類によって、白鳥飼付場、鶴飼付場、雁鴨飼付場などが各地に設けられた。

白鳥の飼付場は、堀切村の毛無しの池(面積はおおよそ1町2反歩、「引堀」が設けられ鷹狩に便利になっていた)、隅田村の丹長池(面積は8反歩ほどの「蓮池」

で中に「島」があった)、また雁鴨飼付場は隅田村から亀有筋、浅草から三河島などに設けられ、特に鴨の飼付場は「堀筋」に飼付け、その周囲は「乾田」とし「葭藁垣」をこしらへ、これに「覗」をつけ、堀が深いところには「餌場」をもうけていた¹⁰⁾。

以上が飼付場の説明であるが、鴨場の構成と狩猟方法に共通点が多いことから、飼付場に鴨場の起源(原形)があるのではないかと推定したわけである。

2. 浜離宮庭園の鴨場の成立と変遷

本園には、庚申堂鴨場、新銭座鴨場の2つの鴨場が存在し、本園最大の特徴となっている。

そこで本園における鴨場について、その成立並びに変遷について見ることにする。なお、江戸期から現在にいたるまでの鴨場の形状の変遷を見るため各時代の図面からトレースして図示した。(図-2)

(1) 浜離宮庭園の鴨場の成立

① 庚申堂鴨場の成立

安永7年(1778)の『浜殿旧記上』¹²⁾には、“浜御庭、蓮浄院殿御住居跡、凡千六百坪余当四月より鶴堀、鴨堀新規出来…”と記るされ、鴨場が成立したことを記している。

しかし、従来よりこの時設けられた鴨場は、現在の新銭座鴨場であると言われていたが、既に指摘したように享保17年(1732)頃の『浜御殿惣絵図』¹³⁾により“蓮浄院殿御住居”が現在の庚申堂鴨場の一部分に相当することを確認したため¹⁴⁾、この時成立した鴨場は現在の庚申堂鴨場と解釈したい。

なお、『浜御殿惣絵図』により庚申堂鴨場が設けられた場所が、鴨場成立以前、既に「田」や「畑」であり、また田畑を取り囲む「水路」も見られることから、享保17年(1732)頃には既にカモなどの飛来地としての立地条件を十分に兼ね備えた、鴨場の原形ともいえる性格を有していたと考えたい。

寛政年間(1789-1800)頃と思われる『浜御殿絵図』¹⁵⁾では、現在の庚申堂鴨場は引堀によってつながった2つの鴨場が田や畑を取り囲むように構成されているが、寛政12年(1800)以降と思われる『浜御地向御庭向共惣絵図』¹⁶⁾では既に現在の庚申堂鴨場に近い形態を示していることから、寛政年間には庚申堂鴨場の形態にも大きな変化が生じたと考えられる。

② 新銭座鴨場の成立

寛政3年(1791)4月の『浜殿旧記上』には、“御庭鴨場池新規出来…”とあり又5月には“当春、鴨場池、掘方之節有来白蓮池へ流れ候清水口之辺、地中より御影石御手洗鉢、式ツ、埋込有之、掘出し…”と記されており、従来はこの時成立した鴨場が、庚申堂鴨場であるとされてきたが、『浜苑紀勝』¹⁷⁾に“新銭座…在池、数

①『浜御殿惣絵図』
[享保17年(1732)頃]
*庚申堂鴨場の原形

御薬園地水草植場

田

②『浜御殿絵図』
[寛政年間(1789-1800)頃か]

鴨場鳥溜り

鴨場

③『浜御殿地向御庭向共惣絵図』
[寛政12年(1800)以降頃か]

大鳥溜

④『浜御殿内外惣絵図』
[天保15年(1844)]

鳥溜り

鴨場

新鴨場

⑤『五千分一東京図測量原図』
[明治17年(1884)]

⑥『浜離宮平面図』
[明治39年(1906)]

⑦『平成3年現況図』
[平成3年(1991)]

新銭座鴨場

庚申堂鴨場

100m

注)
・①～⑥の絵図面は、⑦の現況図と比較するため便宜的に縮尺、方位を合わせた為、必ずしも同縮尺、同方位を示すものではない。
・また絵図面からのトレースであるため必ずしも実体としての形状の通りであるとは限らない。
・図左の名称は絵図面中における鴨場の名称。

図-2 浜離宮庭園内の鴨場形状変遷図

十弓 植白蓮…」と、上記の白蓮の記述と一致すること、『浜御殿絵図』に記された新銭座鴨場の名称の“御葉園地水草植場”の水草が白蓮ではないかと考えられることから、今回新設の鴨場が新銭座鴨場ではないかと理解したわけである。

以上、本園内の鴨場の成立についてみてきたが、鴨場の成立直後から、本園の利用回数が増大していること¹³⁾、また庭園施設（御茶屋や橋など）の建設がなされていること¹⁴⁾を考えると、本園の回遊式庭園としての充実・発展にとって鴨場の成立は大きな役割を担ったものと考えられる。

（２）江戸期浜離宮庭園の鴨場の景観

江戸期の本園内における鴨場の景観がどのようなものであったかを知るために、当時本園を訪れた人たちが記した記録¹⁵⁾から鴨場周辺の情景を抽出し、江戸期の鴨場の景観について見ることにした。なお、庚申堂鴨場に関する記述には●、新銭座鴨場に関する記述には○を文頭に付し、区別した。

①文政9年(1826)8月21日の記録に見る鴨場の景観『千世の浜松』(徳川寛子)

- “庚申堂をぬかづきつゝ、こゝかしこ逍遙すれば、こゝなむ虫の数多有ける所となむ、…”
  - “行程に新銭坐、こゝはいなめきたるけしきども、珍らかにおもしろく、…”
- 『御浜にて女員の記文再記』(梅溪)
- “庚申堂さしてもうでさせ給ふ。高林寂莫玉堂前…。…木々生かさなりたる道を分つゝおはします。此かはらの草村には虫のあまた生出る処となむ、…”
  - “新銭座にいたる。田舎びたるも又めづらかに…”
- 『御浜にて女員の記文再記』(花町)

- “新銭座といへるにいらせ給ふ。こゝは田舎びたるさまにて、いと草ぶかく虫の音を尽したり。”

②天保4年(1833)8月3日の記録に見る鴨場の景観『盛姫君様浜御庭御入之節御道之記』

- “庚申堂に立よる、ほどなく五番堀に至る。…かたはらにむしの声多く聞へければ、まことに珍ら数嬉しく…”

③天保5年(1834)5月13日の記録に見る鴨場の景観『浜御庭拝見の記』(堀利堅)

- “若葉の木立を分つゝ、御鷹場といへるみ池に添て、…”
- “田舎といふほとりに種々の葉を植給へり。又早苗の青みたる田面もあり、…御狩の為にとて池あり。蓮しげれり。あたりは木立覆ひて風もさゆる斗なり。”

④天保5年(1834)8月23日の記録に見る鴨場の景観『浜万比左之』(土岐頼旨)

- “御見合所とやらん申て、葉屋の御腰掛は御鷹のまうけにて、…。御うしろは御鷹峙となん…”

- “新銭座のさかひのほとりは御園にて茄子、さゝげ、冬瓜、その外さままのはた物、所得がほにおひみのりたるも、さまかはりて心も伸る如くなん覚ゆ。”

- “一番二番より八番まで御堀、御鳥溜など見廻り、さゝる山といへる、その形したる高き山にのぼり…”
- 『浜の真砂』(間部詮勝)

- “新銭座御構辺、鳥溜数ヶ所の御堀、御覗所を廻る…”

- “大鳥溜、七番堀、八番堀、庚申堂、御田、等の道すから、その幽邃いはんかたなし…”

『浜の松風』(筒井政憲)

- “新銭座と云へる方の御園より、御鷹放ちたまふ鴨堀なといへる所、かすかす見めぐりて、御葉草の御園に至りぬ、爰にも殊に目なれぬ木草、あまたしな植置れしを、眼かれす見まほしけれ…”

- “庚申堂にいたる、此処道すから田舎ひたる野中のさま、沢田の稲の露ふかく、八千穂のみのりいろ見へて…田つらにつつく細流れに、みつなきの花、うるはしく咲いてたるなど、また眼もあらたに見なしつつ…”

⑤天保13年(1842)3月1日の記録に見る鴨場の景観『浦の浜ゆふ』(成島司直)

- “馬場殿のあたり、御鷹狩のため設け置かるる、あつまやのくまのこりなく見めぐりたまひ…”

- “葉葺といへるは、御鷹狩の時、しはしの御やすらひ所に設けられ、わざと田舎めける屋づくりなり…”

⑥天保13年(1842)9月9日の記録に見る鴨場の景観『浜御苑の記』(知恩院宮尊超法親王)

- “むま場つたひに、あつまやてふ処にいたれば、いと物すきさまの池あり冬はをしかもなど、あまたよりつとへるよし…。みなめきたる所のはたに、さまさまのものづくりおほしたる中、加賀芋しけりて、…山茱萸、山査子など、あかき実の多くなりたるとりにめづらかなるを、…”

- “織殿のかたへゆく道は、田舎めきたる所にて、田面のさま、あはれに見ゆ…”

『浜の松葉』(小山田与清)

- “新銭座といふ所なり、ちひさき池に、かきつはたの咲みてるは、四季さきてふ、ひとくさなるへし、はたけふに、さまさまのもの、つくりおふしたる中、…鳥たまりの池のほとりの、あつまやより見おろせば、水のいろ青くしつまりて、浪もたたす、そこひはかりしるへくもあらて、いともすきさまなり…”

- “山田の畔つたひの道をおはしますに、をしね色つきて、豊年のしるし見せたる田の面に、鳴子ひきはへたるなむ、いとあはれなるさまなるや…”

以上の記述から、鴨場は周辺部の田や畑と共に田園の景観を構成しており、江戸の郊外に設置された鷹場（田園地帯や湿地など）、即ちカモなどの水鳥の生息環境の再現を意図したものといえよう。また、鴨場の周辺の田

や畑に植えられていた葉草や野菜なども実用的機能と共に観賞的機能を兼ね備えていたと考えられる。

大泉水を中心とした部分が開放的で人工的（庭園的）な海辺の風景を構成したのに対し、鴨場周辺は閉鎖的で自然的（田園的）な野山の風景という対照的な景観構成として、記述されていることを考えると、鴨場やその周辺は狩猟場所（施設）という本来の機能を主としながらも同時に、回遊式庭園の景観構成要素としての役割をも演じていたと考えられる。

（3）明治期以降の浜離宮庭園の鴨場

本園は明治維新後の明治3年(1870)からは正式に皇室の離宮「浜離宮」となったものの、明治初年の鴨場は、『二苑紀略』²⁰⁾に“…今ハ茅簪樸生ス…今ハ蘆葦森生スルノミ…今ハ荒廃シテ水アル者ナシ”と、いわれるほど荒廃していた。明治2年(1869)のイギリス王子来朝を機に幕末以来途絶えていた鷹狩も復活し、本園の鴨場の利用も内外賓客の接待を中心とした鴨猟へと変化し、新銭座鴨場は規模の拡大など形状に大きな変化が認められ、また庚申堂鴨場については引堀の数、位置などに違いが認められるなど鴨場の再整備も行われた。

しかし、昭和20年(1945)の終戦を契機に、本園は東京都に下賜されたが、それと同時に鴨場の立ち入り・利用も禁止され、自然のままに保存されてきた。

そのため庚申堂鴨場では都市化に追われたカワウがコロニーを形成し、その数約4000～7000羽ともいわれる程になり、その糞害による樹木の枯死や悪臭などの被害も目立っている。また、引堀の多くも土砂に埋没するなど荒廃が著しい。鴨場周辺の西側は建仁寺垣、東側は四つ目垣によって囲われているが小堀などから鴨場内の様子を見ることは可能となっている。

また新銭座鴨場は、引堀のうち石積みが施されている部分は、比較的保存も良好であるが、石積み以外の部分などでは土砂の崩壊が進んでいる。しかし、庚申堂鴨場のようなカワウの被害は殆どない。ただし、鴨場の周辺はすべて建仁寺垣で囲われているため、内部の様子は一切見ることはできない。

なお、東京都により平成5年度より庚申堂鴨場の修復事業が進められている。

3. まとめ

以上、鴨場の構成などの基本事項の確認、鴨場の起源、本園内における鴨場の成立とその変遷をみてきたが、まとめにあたり浜離宮庭園と鴨場の意味について模式化を試みた(図-3)。

①. 飛来地～本来鴨などの自然の飛来地であった自然の池沼などの場所が、②. 鷹場～鷹場制度のもとで幕府の鷹場として制度的に確立され、③. 鷹場（飼付場）～鷹場において将軍が鷹狩りを行う際、より効率的に獲物

注）記号の大きさは庭園と鴨場の相対的な比重関係を示す。

図-3 鴨場の成立と浜離宮庭園における鴨場の意味

を捕獲するために飼付場が設けられ、飼付場の構成・仕組み、鷹狩、鷹場の全てが集約されて鴨場という施設が完成される。

一方、浜離宮庭園にあっては、鴨などの飛来地としてすでに鴨場の立地条件を備えていた庭園内の田畑や池に鴨場の設備を取り込みつつ、庭園敷地内に鴨猟を行う施設に特化（高度化）した鴨場（庚申堂鴨場・新銭座鴨場）が新たに建設されることとなる。

その場合、浜離宮庭園における鴨場と庭園との関係は、土地利用上は同居併存にみえるものの造園計画（利用）上は4つの段階が想定できる。(a). 一般の人々のイメージする浜離宮庭園で庭園に鴨場が併設されているといった形。しかし (b). 浜離宮庭園における江戸期の利用にあっては鷹狩、鴨猟にかなりの比重があり、又明治期宮内省時代にもこれに近い利用が認められる。ところが (c). 江戸期など庭園一般（園池、その他）としての回遊利用など、相当に盛んで鴨場と併存する形。これ以外に、造園構想上の理想形態としての (d). 両者が完全に融合して、鴨場でありつつ庭園の修景池としてもあるような用景一致形が想定できる。もちろんこれは、鴨場の性格上機能低下をもたらすので実際的ではない。

以上、時代や利用の違いにより4つのいずれかが実体として推移したと思われる。今後は、鴨場機能が主体となることはなく、当面 (c) → (d) を目指しての修復が必要といえよう。

注

- 1) 石関四良 (1930): 鴨場に就いて、千葉高等園芸学校戸定会学術彙報 1.
- 2) 上原敬二 (1978): 鴨場、造園大辞典、加島書店.
- 3) 文化庁文化財保護部 (1973): 御鴨猟の習俗、民俗資料選書 1 狩猟習俗 I、(財)国土地理協会.

- 4) 内田清之助 (1937): 鴨場の疑義, 続野鳥礼讃, 科学主義工業社.
- 5) 参謀本部陸軍部測量局(1883-1884): 五千分一東京図測量原図(複製), (財)日本地図センター.
内務省地理局 (1887): 東京五千分壹実測図(複製), 大日本測量.
- 6) 芳賀善次郎 (1973): 新宿の散歩道, 三交社.
東京都新宿区教育委員会 (1983): 地図でみる新宿区の移り変わりー四谷編.
野村敏雄 (1993): しみじみ歴史散歩 新宿うら町おもて町, 毎日新聞社.
内田清之助 (1935): 我国独自の鴨猟に就て, 野鳥2(5), 梓書房.
黒田長禮 (1958): 旅と鳥, 法政大学出版局.
松戸市戸定歴史博物館 (1992): プリンス・トクガワの生涯 徳川昭武とその時代.
松戸市戸定歴史博物館 (1992): 将軍のフォトグラフィー 写真にみる徳川敬喜・昭武兄弟.
金井利彦 (1980): 新宿御苑, 郷学会.
今橋理子 (1992): 鴨場の風景ー狩野養信筆「鷹狩図屏風」と紀州徳川家旧蔵「赤坂御庭画帖」, 日本の美学19, ベリかん社.
吹上御苑全図 (1813): 国立国会図書館所蔵.
- 7) 東京都教育委員会 (1989): 江戸復原図.
- 8) 池田真次郎 (1981): 日本列島 鳥と獣, 玉川大学出版部.
- 9) 村上直 (1985): 鷹場史料の読み方・調べ方, 雄山閣出版.
- 10) 宮内庁式部職 (1983): 放鷹, 吉川弘文館.
- 11) 本間清利 (1981): 御鷹場, 埼玉新聞社.
- 12) 浜殿旧記上, 東京都公文書館所蔵.
- 13) 浜御殿惣絵図, 江戸東京博物館所蔵.
- 14) 服部勉・進士五十八 (1994): 江戸期浜離宮庭園における造園構成についての研究, 東京農業大学農学集報38(4).
- 15) 浜御殿絵図, 東北大学附属図書館所蔵.
- 16) 浜御地向御庭向共惣絵図, 東北大学附属図書館所蔵.
- 17) 木村毅 (1875): 浜苑紀勝, 東京都公文書館所蔵.
- 18) 服部勉・進士五十八・大多和美佳 (1990): 浜離宮庭園の生活史的研究, 東京農業大学農学集報35(1).
- 19) 徳川寔子(1826): 千世の浜松, 甲子夜話6, 平凡社.
梅溪, 花町 (1826): 御浜にて女員の記文再記, 甲子子夜話6, 平凡社.
盛姫君様浜御庭御入之節御道之記 (1833): 甲子夜話3編1, 平凡社.
堀利堅 (1834): 浜御庭拝見の記, 甲子夜話3編1, 平凡社.
土岐頼旨 (1834): 浜万比左之, 甲子夜話3編1, 平凡社.
間部詮勝 (1834): 浜の真砂 (園苑源流考), 国華88, 国華社.
筒井政憲 (1834): 浜の松風 (園苑源流考), 国華89, 国華社.
成島司直 (1842): 浦の浜ゆふ (園苑源流考), 国華89, 国華社.
知恩院宮尊超法親王 (1842): 浜御苑の記 (園苑源流考), 国華90, 国華社.
小山田与清 (1842): 浜の松葉 (園苑源流考) 国華90・91, 国華社.
- 20) 小宮山綏介 (1878): 二苑紀略, 東京都公文書館所蔵.

Summary : There are 2 ducking field in the Former Hama Detached Palace Garden. These are KOSHINDO and SHINSENZA ducking fields. The ducking fields are presently fenced as a natural preservation area.

Visitors can see the inside of KOSHINDO ducking field through windows (KONOZOKI). There are a number of unclarified points about this paper, therefore, aims are at presenting historical data on the ducking fields.

Some examples are as follows : the definition, structure and distribution of the ducking fields, changes of the composition and characteristics of the ducking fields in the former Hama detached Palace Garden.